士官心得

外療一斑

g 41

F カ 29

序

慶應義塾

蓋醫學士之克壙士答刺也蓋人被創者頗多醫不能作蓋將乃豈遣使求醫於壙士人醫甚言者而壙士云武疑以為壙人戰去而左使人不能抗於敵何豈遣醫療敵人乎乃刻以使書

494.2
Ga
No. 1720
慶應義塾大学医学情報センター
昭和47年7月13日
富士川文庫
2988

其力之為吾武夫吾戎而傷之吾醫又從而療之如此則不然夫所者如何戰也奈曰不然夫所者使敵不能拒之力者使敵不能進之不拒則敵城可獲不進則我師可全是勇者斬士所以沮其事也史畢所以攘其力

也不必殺敵進吾之意伸吾之理而已夫聲之而不出冒進而敢素於是吾觸而傷者豈至國君之所快哉夫所謂神武不殺者是無威畏之牙然則敵人之被創國不能不惻然於我之決恨之矣又吾使者

東清無之道也　聞者唯而退
余時抄海軍必携以譯之
乃以是言為序云
戊辰孟夏　林小史誠撰

凡例

海軍必携ハメモランヂュム、ボール、デン、イウグヂヘンセーオフヒレール」ト云フ少年海軍士官必携ノ義ナリ和蘭海軍一等士官「スハンレース」氏「ブリュテル、デ、ラ、リフヒール」氏合著元来英ニ「マヌール、ホール、子ヅル、カテット」ト云フ書アリシヲ義譯ニシ増補シタルモノナリ窮理器械造舶舶具舶砲汽機運舶律令官制測暦旗号等ヨリ内外醫術各國度量ノ比例和蘭海岸ノ澱淺ニ至ルマテ皆コレヲ略載ス今爰ニ抄譯スル外科術ノ篇

ノ如キハ全ク「レース」氏「リフヒール」氏ノ増補ニ係ル
一人急ニ病アルニ方ツテ医官其處ニアラザレバ急ニ
コレヲ招キ若クハ患者ヲ送テ医官ノ處ニ至ラシム
病劇ナルニ遇ヘバ未タ医ニ達フニ及ハズシテ性命
既ニ危シモシ士官僅カニ病理ヲ知ル者アツテ看護
其法ヲ得セシメバ病トナルハ必シモ医官ヲ俟タス
シテ治スヘシ病大ナルモ性命ヲ維持シテ医官ニ逢
フノ期ニ及フベシ而シテ創傷最然リトス故ニ外科
術ノ概略ハ士官ノ宜シク心ニ記スベキ事ニシテ予
カ此抄譯ヲル所以ナリ

一予素ヨリ人身ヲ知ラズ文意ヲ謬リ以テ事ニ大害ヲ
遺サンヿヲ恐ル疑フ所ノ如キハ本藩ノ医生安藤尭
民ニ問ヒ其實驗ト予カ私意トハ一字低ク記シ以テ
注脚トナス譯成テ後尚就テ校正ヲ請ハントス刊行
ニ急ナルヲ以テ果サズ看官不可ナリト思フ所アラ
バ請フ幸ニ教ヘ玉ハンヿヲ
一原本圖アリ本文ノ間ニ挿ム又予カ覺ク所ヲ以テ新
タニ加フル者ハ註譯ノ間ニ挿ム
一原本物ノ長サヲ記スルハ「エル」「パルム」「ドイム」ヲ以テ
ス予直チニ邦尺ニ改メテ幾尺幾寸ト記ス皆曲尺ヽ

一本篇砲傷ノ論ヲ載セズ蓋シ骨節ニ中タル者ハ必ラス真ノ医官ノ手ヲ待ツベク骨節ニ中タラサル者ハ別ニ子細ナシ刀傷ト火傷トノ療法ヲ参考シテ足レバナリ然レ氏其詳ナルヲ知ラント要セバ大槻俊齋ト云ヘガ著セル銃創瑣言佐藤舜海夫子ガ譯セル斯篤爲默兒砲痍論アリ

一此書固ヨリ医生ノ為ニスルモノニアラス水夫火夫ニ至ルモ讀ミ易カラシメント欲ス故ニ語ハ務メテ俗ニ従フ讀者幸ニ淺陋ヲ笑フ勿レ

慶應四年戊辰閏四月

志摩　近藤誠識

士官心得外療一斑目錄

傷ゐ取扱ひ并びに出血の防き方
手足の疵ゝ血の出る時の心得
頭胸腹の疵ゝ血の出る時の心得
衂血の取扱ひ方
水蛭の口より出る血止らざる時の取扱ひ方
刺絡の後の出血止らざる時の取扱ひ方
脳戦撲ち〳〵氣絶したる者の取扱ひ方

挫折の心得
火傷の取扱ひ方
撲傷の心得
内臓の左右ゆるゝ位置あゝ〳〵わるかる時の心得

傷の取扱并びに出血の防ぎ方

傷ふ切り疵突き疵なま疵打疵ものふもさまざまの疵毒虫ふさゝきたる疵等あり。又其大小にしたがつて。いさくこの疵大切なる疵危き疵命あやうき疵等いろ〳〵あるさ〳〵疵の深さと疵をうけたる場所とみあはせて。疵口より出る血おのづから止るもあり。忽ち死みいたるもあり。血を疵に受たるとき直ちに出る事通例なれども。

打ち疵物ふれさまたる疵ねどふ於てら。其時ら血ら出でず時もぎていでもじまる事あれば。かやうちる時ら能くその手あ〳〵ゝ切ねゝ〳〵あ〳〵ゝ。元来血ら日夜間断ねゝ人身の内ゝ城めぐふりのごとして其本根ら心の臓ゝ出づゝゝられゝ樋をちゝゝて人身躰の諸方へ贈ゝ。此道ゝ城動脈ゝいふ。心のざゝ城出づる所ハ。太くして木の幹の如く。それゝゝ枝葉の如く。次第ふ細く立別ち末ふ至りてら。内眼ゝゝを見ゝ見ぬかゝふかゝゝ。躰中処々の機械を養ゝい。変ドて静脈とゝゝ。静脈ら再び心のざゝのかゝ立戻る樋ちゝられら始

細く。次第ふ太き枝とちゝ。又集りて幹とちゝ。心の臓ふ入ふ。

静脈ら上ふ浮き。動脈ら中ふ沈ゝてあるものちゝ。人身ふ青き筋の見ゆるら静脈ちゝ。脈のうつ所ら動脈ちゝ。大てゝ動脈ら静脈の下ふあるものちゝ。

動脈の血ら紅ふゝて澄ゝ。静脈の血ら黒ゝ城ゝゝ濁るゆゝふ見ゆ。動脈ふ疵城うけちる時ら心の臓ゝ其疵口の方へ来る動脈の道城。強く押つけて出血城とめる事あ。ゝゝゝバ足の動脈城やぶる時ら。股城押へ。手の先或ひら腕の動脈城傷る時ら。二の腕ら押へて血城

止る等なり。静脈を傷るときは。痂口を去ること押て布
を巻くばかりふくるも血を止まるものなり。刺絡として腕
のつがひの内の方の静脈を刺して血を取る療治あり。
られ右ふいひたる事のときは證拠なり。刺絡の時は先づ
紐ゆるくこの腕をかくるくふくるとりて腕と手の
さきとを戻る血を心のざくの方へ行く事能はず。又動
脈を静脈の下ゆ沈てあるゆえこの紐ゆ強くを押され
ざるバ手の先へかよゆ血を止まるなり。この時紐より手
の先までの脈を腹まき上りて綱のゆうゆ見ゆるを全く
右の故なり。さて其腹まき上りたる処を指はたりゆくくを刺き

時を血を走り出ふなり。そのゆうを括を指解きゆるゆを
ハ血をとまらず。痂口へ木綿の切を指四つゆ折りて當
て。其上ゆ布を指巻く時を再ひ血ハ流を出づる事なし。此
事を以て考ゆをバ。痂口より出る血。動脈より出る血を。
静脈より出る血をとゆ事を知るを第一の事なり。
動脈より出る血を。脈のうつ調子ゆつよくく突き出を如
く走り或ひを瀧の如く走る。其色を常ゆ紅ゆして澄り。
静脈より出る血を。脈ゆつを色を黒くくて涌き出る事なり。ゆ
流を出づ。其色を赤くくて黒くあり。
大動脈を傷るときハ。血の出る事勢くく。のたゆゆ

絶数分時の間ゟ命危ふく成ふ事あり。小動脈の疵ゟおのづから血の止る事もあれども。動脈の疵ゟたとへ枝脉ゟ成とも。大抵ゟ血成多く失ふゆへゟ身躰の大害となるものなり。

大静脉成傷ゟ。動脉ゟ危きものゆゑあるべし。

也。害ゟ少ゟ血成失ふ事なきゆゑなり。

ども静脉の血ゟ流き来る勢ゆゑ成ばゟ。血成止ることなりやすし。小静脉の疵ゟ大切なるものゟあるべし。

打捨おきても おのづから止る事多し。但し其処と心の臓との間の静脉成。衣類其外ゟ押へてある時ゟ甚ざ

あしき故ゟ心成ゆけてゟ血成取り除くべし。

疵口ゟ出る血ゟ速ゟ止むべし。血の出る事夥しき時ゟ遂ゟ死ふて即死する事ありたとへ。さ程ゟ至ゟ血成多く失ふ時ゟ精神疲労身躰衰弱又ゟ水腫等の諸症成おこせいたり。

胸或ひゟ腹ゟ疵成受け。内臓ゟ血の出る事あるべ。かゟ疵ゟ士官の手ゟ医官の手成待つべし。

出血成止むる法三つあり

一 疵口ゟ血成塊ゟセ。血の出る口の栓とあるしむる

事。

二 疵口ヲ強く押し止む事。動脈静脈ハ或ひハ其血管の本根の脈ヲ強く押しつむる事。動脈の時

三 切きれる脈管の端ヲ括り或ひハ切れる脈管の端ヲ括り或ひハ切れる膏ヲ

又ハ疵口ヲ縫ふ事。

流き出る血ヲ速ニ塊ましむる事。

どうぞ洗ふヲつとも好し。又ハ明礬の赤「アラビヤゴム」の赤海綿もよし。

原本ニハ此外脂「バルス」の赤「グール」「ステイアセル」「トンデル」「スワム」の片隻「ペンガワル」「ヤムビ」などのセなり。

きれる血留ヲ用いざるべからず。薬性明らかなるべきなり。

しかるに和蘭の医「ホムペ」氏の論ニハ先年和蘭人急病ニて血留ニハ海綿ヲ用いざる。其後二年ばかり刺絡し血留ニハ海綿ヲ用いざるべきなり。三年ハ血液の循環宜しくして死しなり。不思議の事なり。

臓ニハ海綿の片隻入りてありし由。そのバ疵口ニハ膏薬ヲ張り。其上ニハ血止ヲ着ケし。

又原本ニハ疵口ヲ寒き空氣ニハ当る様ヲとある由のせなり。

バ。疵口ヲ風ニハあてぬやうニ心ヲ付し。

血の止りたる時速か疵口ヨ布帛巻く事。布ハかゝきたるもの成用い。あまり強くしめぬやうヨ巻べし。さて其怪我人を躰ヨ益理ちらぬ所ちきやうヨ休ませちらぬ。ぬきたるきず赤しき風ヨあたらしむ事。塊りたる血の落ざるためなり。

出血止る法

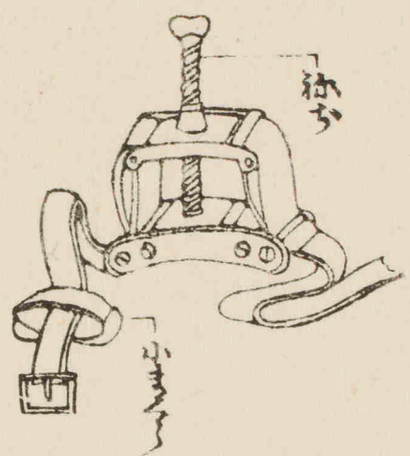
ひら巻木綿の道具又ハ「トールニケット」ものの成用い。疵口或ひら其近所又ハ其脈管の本成ところ押つる ちゝ然るハ其道具ハ常ヨ手元ヨあるものヨあらば。又手ヨ押へらるゝハ。道具ヨ代ちゝ

バ。あるゝ事ハ手ヨ押ゆゞ事ハ。大切なる動脈成傷りて血多く出る時ハ。恥ぢく其疵口成ところ指ヨ押ゆ事。品ヨよれバ衣の上ヨ押ゆる事もあり。さて押つて居りたゝ衣ハ他の看病人ヨ成脱ぎ。又時ヨハ切ハ解き或ひハ鋏ハ剪りて。血管成ところヨ指ヨ押へ或ひハ動脈の本のかゝ「トールニケット」成ハ。血成失ハしめぬやうヨ。其命成救ふ事。

静脈ハ出る血ハ衣類其外其血管成押へ。あるものハ成解きくつろげ。巻布成。又ハかゝ膏成短冊ハ切り。ハ成張りたるのゝあり。大てんハとまる

ものなり。

トールニケット」は二種あり。通例のものは「セームレール」と云ふ革黄色なるやはらかきなめし革にて作りたる小枕にて幅一寸ばかりの丈夫なる紐にて通し。左右自在に動くやうにしたるものなり。但し小枕はかたく詰めをしたるものなり。用ゆる時は此小枕を動脈の上にあて。血の止るまで紐を固くしめるなり。今一つは銅の袱ぢにつけたるもの



袱ぢのつきたる「トールニケット」の圖

みて。紐にてよくしめつけ。動脈にてつよくく押付らるるやうにすべし。もし道具なき時は羅紗或ひは革の幅一寸ばかりの紐。又は頭飾りの紐。或ひは手拭にて代りにて用ひ。小枕の代りにうづ巻にする。又は「キルク」、徳利の木、蝋燭のかしら、かなものなどの類、或ひは錢にて代布にて包みて用ゆ。但し尖りたる所内の上に當てぬやうにして氣にて着べし。布にて幾重も包むなどお為なり。されば「トールニケット」は直に肉にあてゝ先つ羅紗或ひは木綿の細き切にて巻き其上にかけるべきなり。然らざれば長き間にて痛み

裂し。或ひは炮衝創も生ず。品物を脱疽とする事もあるべし。又外科何も用ひざるあり時は。かなきんの風呂布。又は手ぬぐひなど裂き〳〵。二つ結び合せ。結び目を動脈の上に當て小枕の代りとし。余りは左右より下へまわし。血の止るまで十分に引しめ。両端は もとの結び目の上に再び結びとめるもよし。

「トールニケット」の紐は。ゴムの類にて組糸にて造りたるものにして。是れは仮りに作るべし。刀の下に者ちど然る事なり。

「トールニケット」は。怪我人を外の処へおくり遣はし。又急

に医官の手を借り難き時は。どふのこゝかゝる事と心得べし。かゝる時に指にて押へ指にて押へて指りおくときは静脈の通ひあるゝを故に痛みを起す。又は腫るゆゑに覚へ。或ひは煩を生ずるおそれあり。心利たる看病人二人にて折々代り合ふ時は。一小時半時ぐらゐは押へつづけ居るべし。但し仇のあるゝ時は。一と処より指のあるゝ時は。ゆるめ置くべし。

動脈の切れたる処を活る

真の外科術の事なり。

摂ちき時ら素人みゝもねもくべし。但し心ゝ有ちゆゝ
端てゞ且つ手早くもくべし。
動脈の切口ら。疵口ゝ能く改ちあゝ見ゆゝば見ゆゝも
のゝ。其時蝋ゝ引きゝ。絹絲ゝ。其血管の端ゝ有ち
と括り。血ゝ止るゝ。然ゝ血管ら彈力強きものゝ
ゝば。おのづゝ縮ゝ周圍の肉の中ゝ潛り入ゝ見難
き事もあゝ。切ゝより時ゝ過ゝばいよゝ然り。さゝ
動脈の見ゆゝ時括るゝの法ら。蝋ゝ引きゝ絹絲の長さ
六七寸ばかりゝ端ゝ耳り。其動脈の太さゝ或ひら
一重、或ひら二重ら。一つ結びゝ大ゝ輪ゝ。

鍼子の先ゝ此輪ゝ通し。鍼子ゝの先ゝ切ゝ動脈の
端ゝ挟ゝ。いきゝ。一ゝ引出ゝ。此時一人ゝ手傳ゝ
輪ゝ有ちゝ結ゝ糸ゝ血管ゝ方へ入ゝ。ゝ
てゝ糸ゝ括ゝ。ひゝ結びゝ十分ゝ結ゝ
動脈ゝ括ゝ事ゝ出来ゝ。押ゝ通ゝ優ゝ。
本文ゝ一つ結びゝ有ゝ。
ら。今一つ有ゝ
絲ゝ蝋ゝ引くゝ。進入時ゝ
てゝ用ゝ。
又其切ゝ脈ゝ本ゝ
ゝ所ゝ肉ゝ割ゝ開きゝ括ゝ

法あり。これハ人身の結構外科術解剖術の規則ゆ明らかなるべきハ難き事なり。

やまがれ膏ハ切きたる肉ゝ元の如く粘着せしむる為ゆ張るものなり。これ又蒲て出血ゝ防ぐ為ゆもちゆ。

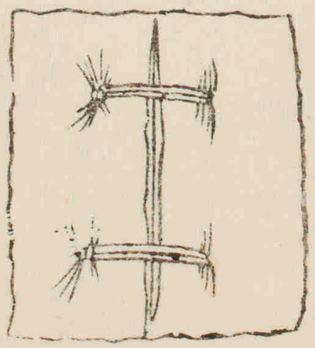
なり。疵の大小ゆよりて膏薬ハ幅六七分或ひハ八九分ぐらゆ。長さ三寸余ゆ切り。切きたる肉ゝ双方より寄せつきゝ後ゆ張る也。静脉ゆ疵ゝ触ることきらゆ。これのみゆて事足ることゝ多し。

疵口ゝ縫ゆゝ平らゝして弧なりゆ迂りたる針ゝ用ゆ。

これゆ蝋ゝ引きたる糸ゝ通し。疵口より凡一分五厘か

ど隔りたる処ゆ突入き。疵口ゝ通ゝ向側ゆ引通して結び留る。

疵口ゝ縫ひたる圖



或ひハ三四ヶ所以上縫ゆ事も

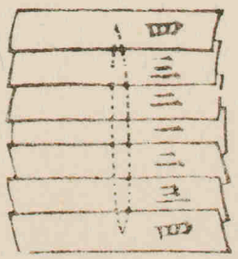
あり。疵の大小ゆよりて二ヶ所

あり。糸ゝ結ぶゆ。

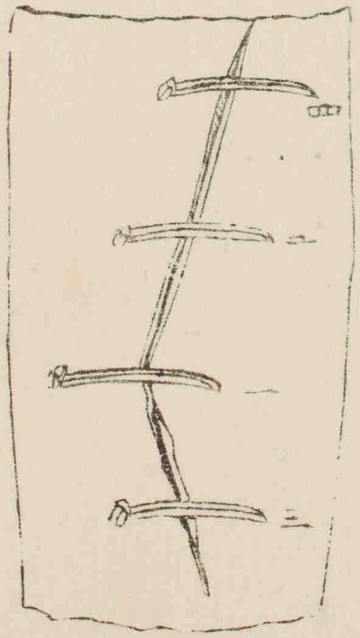
疵の処ゆ引ぱけ寄せ合せゝ持て居るべし。

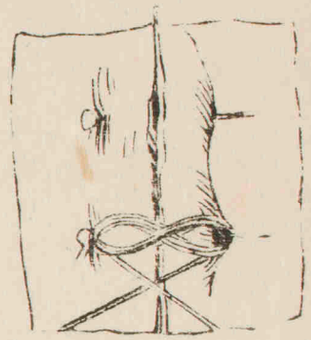
やまがれ膏ゝ張る時も針ゝ縫ゆ時も先つよく疵口ゝ洗ゆべし。血の塊りどつきゝある時ゝ肉ゝ妨ぎゝきゝ粘着ゝる事ゝ得ず。又血の塊りゆ肉の間ゆきゝすきゝあゝゝ其まゝ口ゝ塞ぐゝきゝ。これ

ゝ膿汁醸さるものゝ有り。先年撃剣家の腐根某といふ
ものあり。人の疵まさに斬らんとせしに。日数を経て其疵口痒き様覚ふ。良医これを見て。
元ゆひ時洗ひやうのあるを知らざるゆゑ付き再び
解き膿汁去りゝ。あゝひ。更にこれば逢ひ。このば。
わど毋ゝ全く本復したりといふ。此類尚多し。
膏薬を張るゝ。第一に疵の中央より
ゝ。夫より下の圖の如く。次第に端
の方に至る毋。疵の端ゝ
に外に至るまで張る毋。逢ふ時も



中央を先あし。両端を後にする事なり。又曲りたる疵
ゝ。其曲りたる角ゝ逢ひ
始めて事と心得毋。
疵を逢ふに先つ盡く糸
を通しおき皆通し終りた
る後これを引きめく結ぶなり。糸を切るまでこれ
を結ぶ。皆右の順にするなり。
又帽子針やうのものにて逢ふ事あり。其逢ひかたも皆
前の法の如くにして。糸を通さず。針を肉に通しなる
まゝにおき。この糸を輪にして巻き。或ひらを手ゞにかけ





ておくなり。これを肉に寄せつまり開く事なき為なるなり。さて其上に此糸針の抜者ざるに絶て。巻き布にて巻く事なり。

此縫ひ方なりとも大事なるものなれば。馴まざる者ゆゑなし難き事なり。されば軟やかなる革鯨髭にて以て針に代用なるべし。

馴まざるもの此縫方にあさんと思ひ。銀の針にて一度銀の針なれば痛まる事甚しかるべ

あのなり。

手足の疵より血の出る時の心得

手足の大なる傷にて受る時なり。動脈より夥しく血の出る事なれば。死に至るものなり。されば其疵口の近所又は其本なる動脈に押へなどして。時刻に移さず出血に止るやうに。なるべし。これが為に先つ手足の動脈のある處并に其道筋等平生に心得て居る事なり。第十六枚目の圖を手の動脈に顕し。第十八枚目の圖を脚の動脈に顕せ。

手の動脈を腕の内の方、肉の間に沈てあり。其始を胸より發り横の方へより。前の方頸の下に至り。曲りて肩

の下より腋の下ふわもむき。二の腕の内の方ふ至る。此道々筋傳ふ間に。絶へ来細き枝筋上下左右ふ出して周圍の處々かいわふ。さて本道ふ二の腕の内方ふ添ひ。腕の方に下る。この処ふ両頭肉デ空ストフ、スピール、といふ肉なり。これを手筋握りて肱筋曲げる時。腕の肉脹き上ふ。この肉の事なり。動脈ふ此肉の内のかたの端ふ至り。肱の曲りの内の方ふ両條ふ分れ。何れも腕ふ内の方筋通り掌ふ達し。両條一緒ふ合して輪の形となる。これより細き枝出て。指の左右筋傳ハり指尖まで至る。静脈ふ其道大てん動脈ふ添ふものなり。太きものふ皮

の上より見ゆふものなり。皮の上より見ゆふ青筋ふ静脈なり。静脈ふ血筋心の臓の方へ返ふ道なれば。手の先より腕二の腕筋経て腋の下ふ至り。肩の骨ひの骨の下筋通りて胸乃方ふ至ふ。

指の疵より血の出る時

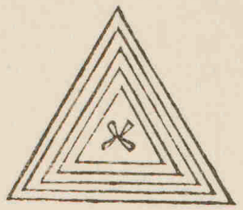
指の疵口の左右筋指ふ強く押へ。血ふ止りたふ時冷水ふ洗ひ。疵口筋双方より寄せ。ひったん膏筋粘至。又其上筋二た巻たのち巻く。大てんふ巻く十分なふものなり。

指全く切れ離れたふ時ふ。右の法ふ巻く十分なるべふ幸あり。其時ふ先づかたがた膏筋短冊ふ切りて。指の切

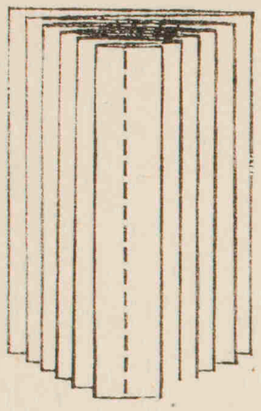
き口に巻き。別ふ此膏やゝ拔かゝゝ巻つけて。真書筆の軸位の太さのもの拔こゝらゝ。これ拔指の左右のそし、動脈の在るところふゝ。動脈より出る血の柳へわたる其余血の滲出る処みな。綿撒絲或ひは「コムプレッス」といふもの拔當て。細き巻布拔してゝゝ。

綿撒絲を晒木綿の切の経拔切り。緯拔ゝつ…て取たる綿だゝ。たる糸なり。これ拔疵口ふ並屈覆ふ時は。後ふ流出る血ちこれふ滲こゝて流れ。其間ふ堀りて自ら血留となる。これ拔厚さは、疵のやゝ…せば、「コムプレッス」は。さゝゝ木綿の切を拔大小いゝゝ拔

三角形ふきり。圖の如く大なる拔下ふし。次ふ小なる拔上ふし。幾枚も重祢中拔糸まてとぢてとあたるものなり。これ又血の出る疵口ふあてるものなり。但し小さ紀三角の方拔疵口ふ當てなり。



因ふ云疵口ふあてる布ふ「ロンギエット」といふあり。きてさゝゝし木綿拔短冊ふ切り。圖の如くなゝゝみ。中など拔糸ふゝ縫ひて用ひ。



手の先きの切至傷

ことさゝゝ掌の傷は。血の出るる最も

甚しく容易ふ留まる事多し。掌より血多く出る時は疵の上ゟ押ゑ強く押ゆ可し。ゟ出血留りたるハ。脈管の切きたるゟ拾ゟ出血留りたるゟ夫。出血留りざれハ手くびの脈処ゟ押ゆ可し。掌の動脈ゟ両條みやゝきて血ゟおくり来るものゆへして。手くびの脈処ハ其二管大てん相近く並びくある処ゟ見ハ。両條ゟ一緒ゟ押へる事の出来るゟ唯此処のミ。但し手くびの脈処ゟ押へるゟ。両手の拇ゟ脈処の口たる所ゟ他の指ゟ下ゟ回して押へるゟ。血の止りたるゟ時海綿と冷水ゟ疵口ゟ能洗ひ。尚ゟきて居る血ゟ洗ひ落し。衣類の切硝子釘骨の片隻、竹木の刺あるひゟ銃丸などの如きものゟ心ゟ着て取り去り。疵口ゟ双方ゟ寄せ合せ。かさがひ膏ゟ疵口の上ゟ覆ひ。掌ゟ甲ゟ回して張る。其上ゟ綿撒糸ゟ布きるゟ可。或ひゟ綿撒糸の代りゟ。水ゟ能浸りたる海綿又ゟ全く乾きたる海綿ゟ用ゆる事あり。又品ゟよりハ脂の末或ひゟ「アラビヤゴム」の末ゟいさゝの節る事もあり。又「スワム」の俗ゟ類ゟありとゟ未詳の片隻若くハ木綿ゟいわつさゝして用ゆ。さゝ甚上ゟ巻布ゟし ておくゟ可。或ひゟ手ぬぐひ、かねきんの風呂布ゟと ゟ

たゝみゝゟ用ゆるもよし。たゝみゝゟ「ロンエット」の如くゟ大抵ゟ

ふゝ部血を止るものなり。若尚止らず血ハ。絶て手くびの脈処を押へて居る所。さゝるゝ止らぬ事なきまれなるものなり。

手腕の疵。肩ゟ近き所ゟいよ〳〵大切なる者なり。手の先ゟ患ひ出しなり。

脈処及び腕ゟ血の出る時

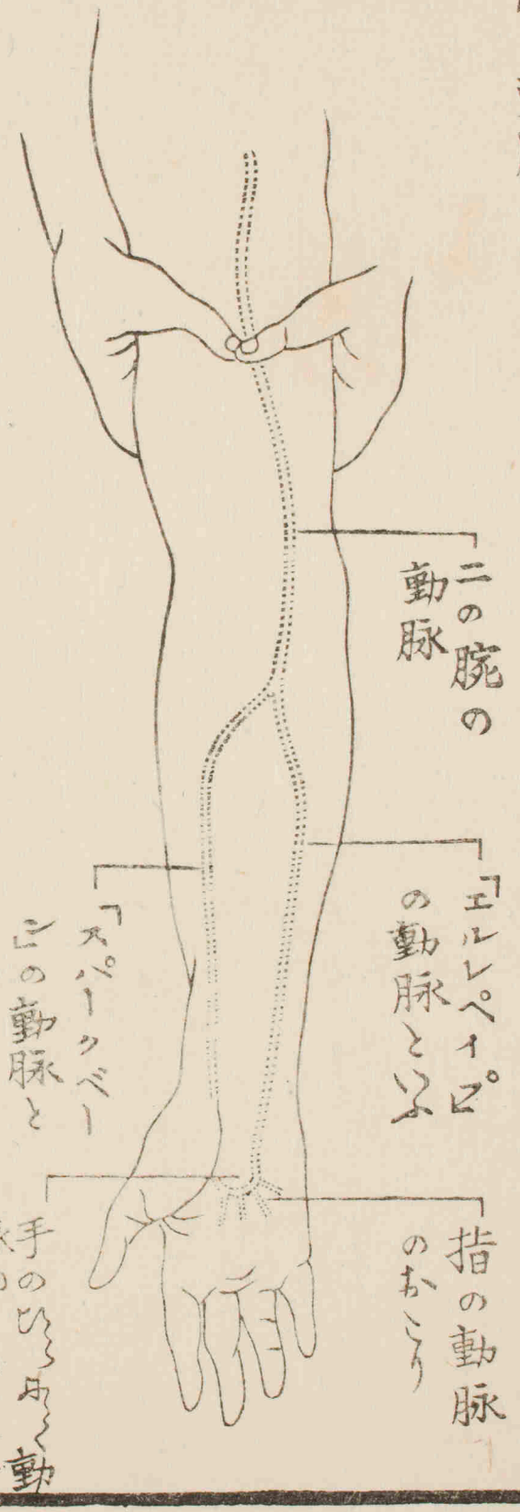
動脈の疵ゟ〳〵ハかきがれ膏ゟ〳〵ゟ大ゝゟ留る。手ゟ〳〵絶へ押へて居るゟ或ひゟ「トールニケット」を以かけ〳〵。一旦出血を止め。切たる脈管を括る所。前ゟ言ふる如く。腕の動脈ゟ両條ふねり。手のひら〳〵ゟ孤ゟ相結るものなれハ。手くびの脈処の動脈ゟ。双方ゟ血を以おくるものなり。その故ふ此脈管此辺ゟ〳〵切ふ時ゟ。切きるゝ両端ゟ血の出る事あり。されバ疵口の上下を押申所き事なれバ。手の動脈の切き口を括ふゟ。甚だむづかしき事なれバ。手ゟ〳〵押へふゟ或ひゟ「トールニケット」を以かけ〳〵。医官の来る迄待所。押へ〳〵出血止りたゝバ疵口を寄せ合せ。かきがれ膏を以粘ス。綿撒絲或ひゟ木綿の切ねどゟ〳〵おれひ。巻布或ひゟ手ぬぐひねどゟ〳〵ちぎりおく所。

脇の曲りの近所の傷

ふゟ図の如く二の腕の動脈を押へて居るゟ。或ひゟ「トールニケット」を以かけるゟ。

腕の動脈の道筋をいづこまでも押へらるゝものなり。或ひは腕の下まで。押へ難き事もあるべし。

腕の動脈をおつける圖



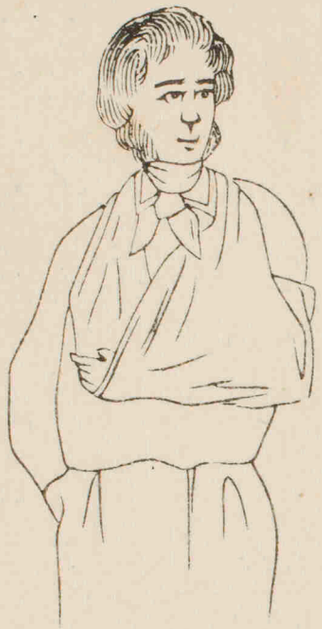
腕の動脈伐傷りたる時

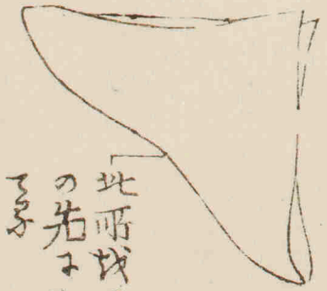
きばこれ伐押へざれば血を止り難し。此動脈を胸の上の方の骨の下まで從がひ。指まで肩の方へ挫てゆく時を此処まで低く窪みたる処あり。この辺伐探きば脈のうつ所探り當る毋。これ腕の下へゆく動脈なり。これは一番の肋骨の上まのつて居るものなれば。この骨の上ふ抑へつくれば甚た押へ易きものなり。これまで出血止るべ。かゝるがゝ膏伐長き短冊まで切りて張る毋。

動脈のある処はかなるで脈のうつものなり。さまでも深く沈みてある処は手ごたへ甚弱し。事ねき時ふ

押し試て。其行る処に調べ。又も医官あり問ひなどして。脈筋のあるかに成心得てあるべし。

疵み巻布しある時も。其処なるのうちに動く事なきやみもしむべし。たとへば手の先の疵なるば。脇に枕みのせあり。又二の腕の疵の時或ひとつ「トールニケット」の掛てある時なども。怪我人に蒲團の上み居しめ。肱に延して枕の上みおのしむべし。枕ともきらるの類なり。怪我人に歩行さるるふも。左の圖の如く布みを肩み負ハしむべし。風呂しきなどの如き四角なる布に。向ふ合せみ隅に耳りて二つみけて。みの折目のある方の中央み手の先に

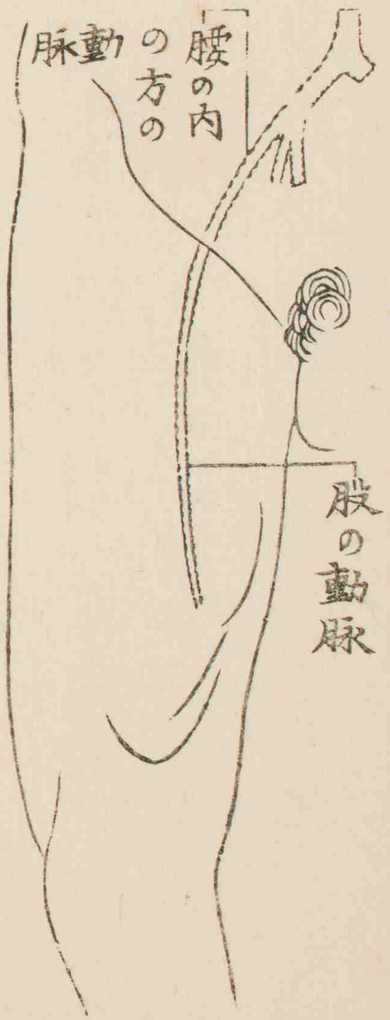




の外ふ余りたるふ所も。内み折らるるの疵なるば。手ぬぐひなどみ。手の先の鈎り。肱も自由よりふやふしてあるる。

腎の動脈も心の臓より出て。腰の内の方より傳至る。左の圖の如く腹と股との界陰処なる指

三本ありて隔りたる処まで達す。腰の内のやうの動脈といふ。



うれうり股の前の方ふ至り。内股ば後ろふ半回りわと回りたる下ま。膝の後ろふ至る。是まで達す股の動脈といひ。膝の後ろの四ふ至りたる処ば。膝の後ろの動脈といふ。此処ふて前後ふわの巻。臑と脛との動脈とり。内の間ふ深くかうれ。足の甲と蹠ふ於て孤りふりて。双方相結

ま。うれうり小枝出て足の指ふ至る。手の動脈と同下事なり。此辺ば足の先の動脈といふ。但し腰ふり髮ふ至るまで。絶へず細き枝ば出して。周圍の処々ふ至る者なり。脚の静脈ば指先等ふり始り。次第ふ上り。股ふ於て一本ふ集り。腹の方へ返る。其道筋ば大抵動脈ふ添ふ者なり。

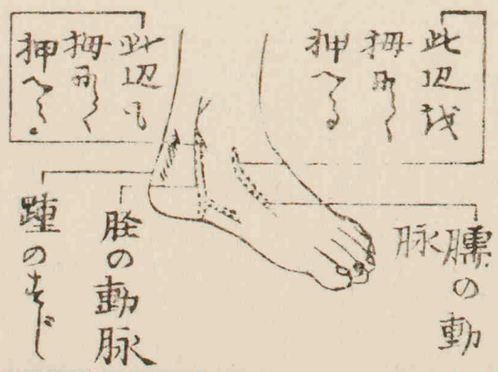
足の指の怪我

ば船中ふて数うれあり。ときさ暖なる地方ふて水夫など素跣ふて。たまき或ひば薄き履又ば履下の莫大小若くば襪ふて。たまく事もあきば。鑿小刀など落来り。或ひば硝子の片隻等の如きりの怪踏て大工ば誤て手斧ば踏む等ふて。思ハに痛ば

受るものなり。其手當方は手の指の疵ふ同じ。疵口は後ろ迄。二本の指にて横に押へて血迄止め。疵口をかさがひ膏にて二巻き巻き。前の法の如く手當迄

足の甲及ひ蹠よりの出血は止る事甚だ難し。こゝみ蹠は腸多きものなれば。其間の動脉を見難く結び難しと。あ一疵口迄押へても尚其出血止まざれば。膕と脛との動脉迄強く押ゆべし。其法先つ足迄上に向させ。片手の拇を内踝と踵の筋との間迄押へ。今一つの手の拇を膕の高き骨の前角に。足の拇の方へ引きたる線の中に

於て。足の甲の上迄押へふなり。膝の後ろの動脉は前後にあつて。前なる膕の肉の下迄潜る。足の甲の上に顕はる。後ろなる膝の屈のいさゝ下に枝迄生し。内踝のきに至て顕はる。平生に押し試る脉のうつ処迄探り。心に記へ置べし。こゝに出血止らば。血迄あひ落し。硝子釘等肉にまきあるものは迄取り除くべし。踏拔にくはかゆの物又は刺ねど蹠の肉の間に深く扶りて居るものなり。能



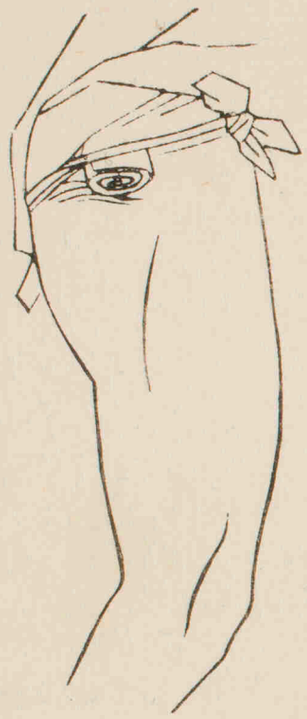
心ニ着ベシ。さて痂口ニ拭ひ。長きかさがひ膏ニ以て。痂の上より足の甲ヘ回して張りあて置し。

膕胫の動脉の痂を甚だ大切なるものなり。速ヘ其本根の動脉ニ押して。其出血ニ止む可し。膝の後ろの動脉を探り知り難しとせば。股の動脉ニ押へふ所ニ。此処ハ「トー」ニケット」ニ掛る可し。宜しき所なり。

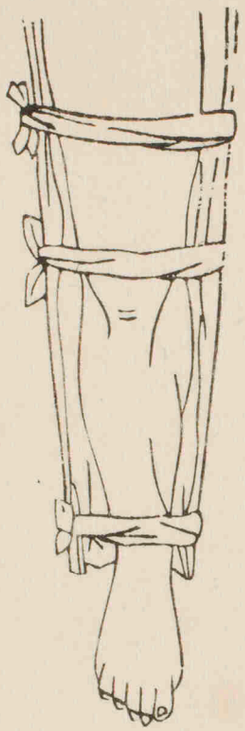
外科術の療治ニ受るすべて膝ニ曲さしめ。あく事あり。しかるして膝の後ろの動脉を一直ニ伸ばすべし故自ら押さるべし。此法を手の先又ニ脚などの傷ある用ゆ可。唯脚ニ拭きびしく曲げさせるのみあく動脉を

押さるべし。

股の動脉の痂を膕胫の痂と同じく股の動脉の本根ニ押ゆ可し。腹と股との界の処ヘ。脉のうつ手ごたへある故ニ假りに此処ニ押へ。其間ニ「トールニケット」ニ用意し「トールニケット」を此処ニ二三寸下ヘ置けるなり。圖ニ見て知る可し。此圖ニ羅紗などの幅一寸ばかりなる。ニ堅く巻つけて。動脉の処ヘ當て。首飾りの紐ヘ薄り。「トールニ



「ヤット」ハ代用したるものなり。出血止らバ短冊ハ切りたる紙にかゝ膏紙張る。手軽く丈夫なる巻布紙を用ひ「コンプレッス」前ハ紙わきの上ハ居らしめ。疵のあるハ辺ら空所屈なる事なきやハ。其後怪我人ハ蒲團にしむべし。膝ハ都合次第延して曲て置くもあり。脚曲て怪我人紙他所へ移ス時。又ハ端所ハ載せる等の時。其疵大なるハ又ハ関節の疵骨の挫折等あるハ。脚ハ副木紙にて送るべし。其法先ハ疵口ハ巻布紙し風呂布ハ巻ハ紙張ハ。手軽く丈夫なる巻布紙を用ひ。其上ハ巻布紙を最もよく巻て。其上ハ居らしめ。疵のあるハ辺ら空所屈なる事なきやハ。



呂布ハ図の如き四角なる布紙なり。其真中ハ足紙のせ。細長き木紙一本にて風呂布の両端ハ結び。脚ハ能ハ図のごとくハ。柔ハ布紙巻き。いひ用ひ。木ハ押さへ痛ム紙起ス事あれバなり。其のち副木ハ手ぬぐひ等の物ハ三四箇所薄る。股の疵膝の辺の疵ハ。腰まで当る事なり。臑脛の

疵ならバ際の上二三寸の処まで〆〆十分なり。
なりどよき副木なき時ハ。木の皮ハ用る事あり。印度〆〆
ハ蓋花果の樹最も宜しといふ。木の樋又ハ酱の底〆用る
事あり。或ハ鉛亜鉛も。怪我人ハ他の船〆移し。又ハ病
院〆わくるなどみも。副木の代りふなるものなり。
日本〆〆ハ柳の樹もつともよし。或ハ杉の板ハ細
く切りなるも臨時の用〆合ふべし。もつとも内ふ
當る処ハ角なきやう〆。刺〆心ハ用申べし。古き板
ハ用る時ハ。釘〆心ハ着べ〆。菓子の折の白き木ハ最
妙なり。臨時の用〆なる者なり

動脈より出ふ血。右の法ハ用申と雖も。或ハ手ハ押へる道
具手元〆あ〆〆。又ハ動脈の有る処ハ〆〆〆知ざ〆
て。押へ〆ふ效〆なし。出血とハ〆〆止ざふ時ハ。或ハ
綿撒絲。或ハ海綿ハ厚〆布列絲。かを
がれ膏ハ其上〆張りめ〆〆して。洩る〆処なきやう〆
し。医官の来るハ待つべ〆。
肉の間の小動脈又ハ皮の小動脈ハ〆〆
バ〆〆これあるものなれ〆〆。大なるハ膏藥と巻布〆
てなるやう〆止るものなり。
頭胸腹の疵より血の出る時の心得

頭及び頸の動脈

を咽のところ氣管の左右にあり。心の臟の血これより頭に至る。拇と食指にて氣管の両わきを探きバ甚強く脈のうつ処にあたるべし。これ頭の動脈なり。此動脈を頭の半分ごとの処にて左右おの〳〵二條づゝ分わかつ。一條を内の方脳眼及び耳の内の方小血管おくる管なり。又一條を外の方の動脈まゝ数多の枝に立別き舌顔頤又ハ頭の後のやゝ耳の外側等へ血管おくるものなり。静脈を頭の内側にも外側にもあり〳〵。頭の血管心の臟のやゝへ帰す。

頭顱に疵を受る時を駭しき出血ありて速に救ハざれバ危かなる事多し。疵浅きときを顱より外の肉の血管のみ血管出し。深き時を顱骨脳膜よりも出血あるものなり。顱骨の外の動脈を直ちに骨の上にあれバ。其切きるる端を動かし易かるべし。これにふるゝてこれ管括るを甚難し。疵口若しくを其近所おゝ押へふを易きものなり。頭の後の方の動脈又を耳顳顬等の動脈もまた此の如し。

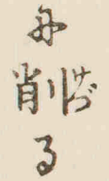
疵浅くして骨までとゞかざる時を。とゞ管押へ〳〵暫時出血管止め。疵小なれバ周囲の毛髪管鋏ミ剪り。かさぶれ膏管ぬるべし。其幅廣きものハ。其大小にゝ二れ針

或いは三針ばかり進めあげ。あつらへ指をもつて押へて其出血小ざれば。此法いづれも行ひ事能はず。其ときは「キュルクロ」の徳利の丸く切りたるを。又は布巾にかゝ巻きたるなど。幅一寸ばかりの紐頭に薄りつけ。動脈巾を押さへ。又は首飾りの紐の中わど巾一ツ二ツ結び玉をし。その巾動脈にあゝ両端をもつて紀のやうに後ろにまゝて。たゞび違ひに。再び前に取り元の処へもどし。結び玉の上にゝ結ひ止むべし。

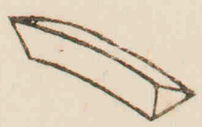
其疵深くして顱骨にとゞきたる時は。血は骨の間の海綿の如き所よりも出で。骨の内にある脳膜の動脉より

も出るものなり。其時は黄蝋若くは「キュルクロ」にゝ尖弾の先きのやうなるもの巾作りにゝ添巾通し。其疵口の開きたる処にあてゝ。骨の間と骨の下とより出る血巾止めしむべし。

黄蝋を



かやうに削るなり。疵長ければ



此の如く削りて用ゆ。いづれも細きかた巾下にあるなり。

疵口開きて甚だ広き時は。其上に尚海綿巾をあらめば弥よし。さて其疵総躰の上に。上より海綿巾あゝ

手ぬぐひなどみな〳〵薄りあり〳〵なり。
顔の疵ら。大てん其疵口廣く開き夥しく血の出るもの
ら速み手あ〳〵ばらなり。
咽の疵ら速み夥しく血ばら出ばら。又氣管み傷つく時ら
呼吸ば塞ぎ。或ひら氣管み血の流ら入る事あり。或ひら
此処の神経ふ疵ば着け。其側ばる大静脉み風ば引ける
〳〵等みな〳〵忽ち命ふかり。ら事多し。
かり。ふとき ら速ふ其疵口ば冷水み〳〵洗ひ。氣管ら其
俱わき。皮肉ら合せ縫ふなり。
ら元或ひら頸の左右の疵ら。咽の疵ら。危急のため

ふ受けるる疵ら。血管ば切る事
あり〳〵頗る大事み及ぶ事あり。頸の大動脉ば切る時ら
ら危し。其時ら疵口又ら其近所ば押〳〵速み其
出血ば止むべし。但し此処ら強く押さ〳〵みら堪へ難
く。又久〳〵押さ〳〵みも堪へ難きものらば。其心得
み〳〵押伊所ま事ら。此時ら血管の端ば括る法ま一の
良方ら速ま括る所き事ら。頸の静脉の切きる時
ら。かり〳〵ば其両端ば括るべし。一端ら血の流出ば止る
が為み。一端ら血管み風の入る法防くがためまた
ら。

凡そ咽喉或ひは頸部の左右の痲痺。右の如く手あしなえて後弱なる事。布切れ前髪のあたり前髪のあたりまでかけ。其両端を腋の下より後ろへまわし。脊にて結びわる。又長さ凡そ一尺六七寸ばかり。幅一寸ばかりの布切れ。前髪のあたりまで帽子針にて止め。該ハいさゝか俯ませ。両手を首飾りの辺にて。胸へ引つけ。両膝おりにて結びて止む。さて怪我人を蒲團の上に居らしめ。頭を窮屈なるまでかゝるべし。怪我人なきなれば動かすべからず。西官の許可あるまでは飲物を與へ置て。自殺せんとする咽の痲痺なれば。躰自由にならぬゆえ。番人の居ぬ時に一と引にこの括り布にゆるめ直ちに死に至る事なれば。凡そ血管内の間に引きこまれあるものなり。又ハ突痲なまなれば血管の端切引出し難き時なれハ。前にいひたる如く黄蝋「キルク」の類切先細く削り詰めたるもの。其出血切止め。其上にかゝる膏切粘るべし。

胸の痲

胸の痲を唯皮肉だけの時と。肋骨までとゞきたるまでにて。皮肉の動脉切傷りたるのこの時を命に

かゝるわゞの事あらゞるとき先づかまかの膏にて粘
ゞ疵口にて塞ぎ其上に綿撒添にて布きつゝ祢或ひは木
綿の切きにいゝ重ねたゝみ〳〵らみにて當て又他の木
綿の布あゝられにて覆ひ後しろねまいしてきびり止め
わゝ所し。

胸の中まで通りたる疵あり又二つあり胸の内へ入り
て腑臓腑にぬゝぬものを猶可なり肺の臓心の臓ね
ゞみ疵つきたるなら此上もなほ危しとき心のさうハ言
ふ及ばず其辺の大動脈大静脈にて傷りたる時ハ出血止
まゝゞして忽ちに死ぬいたる事多し出血の色薄くし

て清き泡たち咳嗽上るゞゝみ涌き出るものハ肺より
出る血なりこれまゝ甚だ危し肺と心とみ疵つ
うざゝるゝ肺の膜と胸の膜との間のきゝすみ突き入き
たるゝ空氣にて〳〵みみ吸らみ〳〵命みつゝふゝ〳〵あるゝ
のなり。

凡そ此の如き怪我人ゝ真の医官みあゝざれバ取扱ひ
難きものなり。されバ士官の手みゝい能く外の疵にて塞
きゝ空氣の入らぬやうみし。医官にて待つ所し。外の疵を
塞ぐみゝ先つ其怪我人の呼吸みゝ氣につきて其引く息の
止りゝ指みゝ疵口にて押へ空氣の洩らぬやうみゝ

かさがに膏又は「コルロヂラン」なる粘り。外の空氣の透り入る事なきやうにするなり。或ひは「かに膏」と「コルロヂラン」とを一時に着ける事もあり。さて其上に卷布なして、なほ此の如く手あしの出来たる後、怪我人を安坐させ甚しく動く事なく禁じ胸あを冷水に浸したる布にて當なほし。又怪我人なる医官の居る方に送るに其胸の疵いさゝかのやうに見ゆるとも決して怨に事なる事なほ厚く心を用ゆべし。大てい乘り物なども載せ搖ひ行くべきなり。怪我人なして無言なほ〳〵むづし。

腹の疵も臟腑まで通らぬものは命に別なく治する事なきものなり。腹の皮肉の動脈なる傷なられば血の出る時は太きものなれば其血管の端なる捨て疵口も長きなれば膏なる粘るべし。怪我人は脊なる倚掌なり立て坐せしめ腹の皮のたるむやうにみるべし。疵口より冷水を注ぎなる布なる。其上なる幅ひろき紐なる縛りなるべし。

臟腑まで通りなる腹の疵は。やはり危かき深手といへど其疵口より腸或ひは網膜なる吹き出したる時は怪我人は脊なる倚掌なり立て腹の皮のたるむ

ゆう小坐せしめ生温き湯ゆ〳〵其臓腑ば洗ひ指の先ば油ゆ浸して用心しちの〳〵こまば疵口の中へ徐ゆ押しこむべし。其のちの取扱ひ方ら前の如し。

胃肝脾腸腎膀胱大血管ゆ傷ば受てらめより食物胆汁糞尿等滅ゆ出る時ら多くら死ゆ至るものらり。休まずゆきこまば疵守りらまゆ心ばつきゆ居り。其後いろちる事め出来るゆ待つべし。

衄血の取扱方

衄血ら大てい恐ら留きちのゆもあるゆ。又止めがたきものゆもあるゆとつべし。於らゆふりて駆しゆ血ば失ひ身躰の害となり。終ゆ死ゆ至るものゆ吹ゆ。若年多血の人鼻ば打ちねどして出る衄血ら患ら及ばず。又多血の小年血多く頭ゆ升り頭痛しちる時ゆ在るゆハ却て衄血ば出しらる。熱病ゆ自然ゆ狂ゆたる時ら。衄血ゆつらゆ妙用ゆり。凡ゆ中ゆりゆ時ら出られば止るら却て悪し。衰弱しちる人疲れる人まらら腎敗熱悪性の神経熱瘧雜ケウルボイら出る患ゆる人ゆ於てら。ゆるゆ留きたけ速ゆふられば止むべし。大抵の人ら。衄血の出るときとゆ〳〵頭ば下ゆさげるものゆる。衄血ら俯めばいよ〳〵甚しく出て止らぬものゆり。

衂血を止るにハ帽子、頭巾、襟巻などの如き頭及び頸を押つけ又ハ纏ひたるものを取り除き涼しき風を其室にいれ。あるひハ病人を涼しき所に連ゆき躰を直くし両肱を揚げて坐せしめ頭ハいさゝか俯かせるなり。これハ咽の中へ血の流れ入らざるためなれバ。あまり甚しからざる中ハ手まくつし親指と食指とにて鼻をつまみ。海綿をかひ小さくし水銃やうのものにて額より鼻の上へかけて冷水を灑ぎ。又布を冷水に浸して頭の上にあてる。これにより血ハおのづから塊りて鼻の栓となる。これにても其血尚とまらざれバ明礬を冷水に溶してこれを鼻の内に灑ぎ或ひハ明礬の末を小さき紙匕にて鼻にすひこむべし。出血止るとも猶しばしの内ハ病人を動かす事なく頭ハ真直にしておき冷水を布にしめして頭を冷しむべし。

衂血を止るにハ明礬水に綿撒糸を浸して。これを鼻にかひ。又一ひらの紙を口中にかむもよし。

水蛭の瘢より出る血止らざる時の手当方

水蛭もし皮の小動脈に食ひ當る時ハ。水蛭の落たる後に。おびたゞしく血の出る事あれバ。瘢の近所をよく洗て見れバ其血の出る口ハ能わかるものなり。大抵ハ冷水

又ハ「アラビヤゴム」の末にてゆゑ。血を止るものゝ
もられゆゑ尚止らざハ。疵口の横より針にて突通し。其
針の下に絹糸ゆゑくるゝ〳〵とまき。かさゝゝ為め血に
止るなり。又やき小手ゆゑ血にて出る事もあり。

刺絡後の出血の手當方

刺絡の後一二時なりて疵口より思ひがけなく
血の出ることまる事あり。これハ衣類ゆゑ腕の下、二の腕
ちゞの静脉強く押さるゝ或ひ〳〵ちゞの脇を動かしたる
ゆゑ。疵口の巻布いざりて。疵口より奥の静脉に押
し。これゆゑて再びいゞ始まるなり。其時ハ先つ巻布に

解き。押〳〵ある衣類を取り除けバ。大てゐ血を止る
ものなり。さゝ拇ゆゑ刺絡の疵口のいさゝ、この下の方に
押へ。血に洗ひおとし。木綿の切に八重ゆゑ疵
の上ゆ當て。其上に拇ゆゑ疵
違ひゆゑ脇の上下ゆかけ。疵の上ゆ十文字ゆ
ゆ。其後脇ら動かぬ事なき。やゝゆ。布ゆゑ肩ゆ
かけさゝ〳〵おく。

十八仮目の圖
の如くを一し

頭に撲て氣絶したるものゝ取扱ひ方

凡そ高き所ら落て頭に撲ち或ひハ頭ゆなまゝに
受る等ゆゑ氣絶する時ハ多くハ手足其外の疵。又ハ骨

の挫折等ハ兼るものなり。

船中ハ〳〵ハ船具より過ちて手ハ〳〵して甲板ハ落ち。又ハ甲板の出入口より中層ハわち。或ひハ船の搖る時重きもの頭上ハ落来りまんまるきのやうハ〳〵ハ。帆綱きれ〳〵帆ハあれ〳〵ハ。若しくハ甚しく搖る船ハ〳〵ハ。大砲其外の重きもの動き出して。ハれぶためみたく〳〵等より。此怪我出来るものなり。

其怪我重きものハ全く氣ハ失ひ。躰ハ動く事なく。眼ハひらき。或ひハ半塞き。呼吸ハ緩ゆして遅く。或ひハ呼吸せざる中ハ見へ。躰の温きまま次第ハ減し。速ハ屍の如く冷くなるものなり。或ひハ覚へて両便ハ今泌ちる事もあり。

其軽きものハ全く覚へなくまぶゝハ至らず。あるひハ一旦氣ハ失ひたるも速ハ氣のつくものなり。然ども眩暈、耳鳴、胸のあしきなどの患甚しく。又ハ発汗しなどハ嘔く事もあり。又ハ眩しの内ハ。其上頭痛甚しきものなり。さるとても頭痛ハ別ハ害ハのときなどして。自づから次第ハ治する事多し。

此怪我ハ重きものハ。次第ハ総身痺して速ハ死ハ至る事多し。尤おのづから回復する事もまれとのなきハあ

らぐ。

我が相識るもの擊劍の稽古せしとき。面ヲ打落さるゝ。後ろ仆き後腦ヲ強く撲ちたり。氣絶せしかど面ヲあゝむけしてさかりどの事とも見へざりしが。其日の黄昏より發狂し。一二月の間治せざりし事あり。

此怪我人ヲ取扱ふ法ヲ。先つ怪我人ヲ暖かなる室ゐ移し。其落る時痕ヲ受たる處あるゝ故。骨の挫折あるもあるゝ。能く穿鑿し。かしこく取扱ふ事あるゝ。心ヲ用ひて其手當ヲ怠るべからず。衣類ハ無恐みやまず丁寧ゐ脱せ。如痕打痕うち身挫折等あるゝハ。蒲團の上ゐ夜着ヲ左右ゐおきて

其間ゐ怪我人ヲのセ頭ハいさゝか高くして即しかゝ

るべし。さゝ大なる陶ゐ熱き湯ヲ入れ。或ひとゝ熱き砂ヲ嚢ゐ盛りて躰ヲ温め。又ハ温き布ゐ躰ヲ摩擦し。「オハ、デ、コロニー」といふ香水又ハ硼砂水などの如き香高き藁ヲ鼻の下ゐあてゝ持て居り。別ゐ「ホフマン」精二十滴ヲ清水二たもの内ゐたゝして。とき飲ましむべし。初ゐ水蛭ヲ着け。或ひとゝ冷水なゝ頭ヲ洗ふなどゝ皆あゝ。決してなすべきの事。

病人氣息ヲ取戻したる後。ゝかなゝ。ゝ腦ゐ活動非常小強くなり熱ヲ帯ゝ。譫語ヲ発するあり。この時

艾子灸入きたる湯ゆゝ脚湯さゝ冷水あゝ頭灸あゝひ。耳の後ゆ水極灸つゝし。

打疵、切疵、骨の挫折等灸兼るものゝ。其取扱ひ方前ゆ記したる法の如く手當灸たるゆ。挫折の事ハ後ゆ出ス但し流血ゝ氣灸失ゆゝ居る間ゝ於てゝ。其勢甚ゞ弱く脳の活動立ゆゝる時ゆなれバ流血の勢ハ つゝて常よりも鋭くなり。出血灸止る事甚ゞむづかしくなるものゝ。氣灸失ゆゝ居る間ゝ。肉ゆも覚なくして。内の方弱ける事ハ。つゞひの離きたる骨及び挫ゞきたる骨ゆゞ灸常の位置ゆ直さゝ。なゝ易きものゝ。なり。されバ氣絶して脳の

たゝきいまゞ立ゆゞるゝ間ゆ。血管灸括て挫げたる骨つゞひの離きたる骨ゆゞ灸直さ灸よゝ。

挫折の取扱ひ方

挫折ゆ二種あり。骨のつゞひのそゆきたるゝと。骨灸打碎きたるゝとなり。骨のつゞひ離るゝ時ゝ。されゆよりて其手其足の形ち灸失ひ。動くて事難くなる等さまゞの害灸おゝし。骨の碎けたるゝ。其近所の肉ゝ灸失ひそれらき心ゝ任せぬやうゆなるゆ。されゝ灸治するゝ。其そゞきたるつゞひ灸元の如く連祢。折きたる骨灸相接しもるゆあて。其法其つゞひの離きを

又ら折きたる骨ばかりを引き出し。元の如き位置ゐ直し。つがひの離きたるゐら再びもとゞきたるやうゐ巻布ばし。骨の折たるゐら副木ばして動かざるやうにはしわく可し。

近こらら。骨の折たる時ら。粘ちどばば厚くぬりつけて。其上ゐ巻布ばさる法にて。副木の法ハ用いざる事とりたきども。怪我人ば他所へおくりやるとら。副木のかくばよしとも。凡そかやうなる怪我ふ於てら真の療治ら医官ゐ任さるべき事にして。それまでの手当ばとて。かやうゐしておくる事なれば。粘ばぬりたる法ば用ゆ

きバ。られば解くとき易かるべきハなり。

骨のつがひの離きたるとき骨の破きたるとき。見分難き事多し。されば医官ふつかなるでら。つとめく其挫折かる処ゐ在理なる事なきやうの手当ばもとゞし。こゝふ骨の破きたる時ら骨いきとこの動きても甚よしく痛み起らし。さまく の害となるものなきバ。其心得ふく巻布ばし。骨の動く事なきやうゐし。他所へ移さるゐ都合よきやうゐもとゞし。

都て腕の挫折ら。ホ十八枚めの表の圖の如く。布ばかけく肩ゐ負ハしむる事最ともよし。二の腕の挫折ゐら

其上ゟ副木三本ニ用ひ巻布ニ巻し。脇より前の方の挫折るゝ。幅廣き副木一本。脇より手頸の先までかけて薄る様し。尤も挫折たる処の近所ゟ。副木ニ当る前ゟ先つ真綿或ひゝ木綿のゝ綿撒孫ちゞ二重〳〵布列祐〳〵。其上ゟ木ニ当つ様し。扱ちき時ゝ草ニ刈り。又ゝ柔らかき木の葉を取りて。綿ゟ代用さゝる事もあり。

脚の骨ニ挫折たゝ時ゝ。其取扱ひ方ゝゝゟ同し。副木の圖ゝ弁二十二枚めの表ゟ出せり。引合せ見るべし。

の時ゝまゝ。副木と脚との間ゟ綿ニ厚〳〵かひ。動ゝぬやうゟ縛るべし。

肉ニ撲て痛ミ二起し或ひゝ脹ニ起し。又ハ挫折ゟ痛ミあゝ等の時ゝ。冷水ニ洒ぎ。或ひゝ冷水ゟ湿しゝ布ゝ度々挫で。巻布ゝいさゝ。この後やゝゟ。余り堅過ぎざゝ。やうゟ。

火傷の取扱ひ方

火傷ゝ。其時の火の強弱ゟ。焼ゝ。時辰の長短ゟ。ゝて。軽きゝゟ皮の上のゝ。この衝ゝ起こし。強きゝゟ其近所の肉都て爛ル腐るゟ。

船中ゟ食用の火焚処甚ゟ狭く。ゝ晝夜大ていゟ絶間ゟ火ニ焚く故ゟ動ゝ。ゝバ爰ゝく火傷ニ成ゝる

事あり。蒸氣船ふくろ蒸氣の火焚所の火ふくゝ火傷し。又ハ蒸氣ふいき鍛冶場なる鞴の火ふきり。或ひら大工揺ろく船ふくゝ処々の落ひ塗り場して居る時ら沸騰する瀝青とびきて。とれこのためふ火傷し。又戦争ハいふふ及ハ操練の時ふも。火薬のためふ怪我場なる等ら。近年「ヤムビー」といふ川ふ。小舟ふくゝ乗りらし上陸した時ふ地雷火不意ふ発して。こ当ごのためふ士官一人卒十一人重き火傷場したり。又「ボルヲ」といふ島ふくゝ支那人其塞の内ふ火薬場多くまきもちしあきし事あり。其時も数多の人火傷場蒙りたり。

凡そ火傷ら只表皮のゝふくゝ深く内すで及バざるもの ふくゝも。其場処甚ど廣きものら。燃衝熱場発し。或ひら肺心腸脳等の燃衝場も発する事あれバ。自然命ふかゝる事あり。其場処いよくゝ廣きハいよくゝ危しと。燃衝ハ其処赤き色ふ成り。熱甚だしくして。腫毒いれむ症場いふ。火傷したる時ら。其近所い極よ此の如くなるものなり。燃の字場火焔ふ書くハ火傷ふ似たる病なれバなり。蘭語ふくゝ「オントステーキンフ」と「オントステーキンフ」ら火場焚きつけるといふ字なり。

火傷の怪我人は取り扱ふの法は先つ能く心を用ひ衣服は脱しむべし。多くは表皮は肉は離れ衣の裏は粘着するものなるべば。心を付け衣は脱ぐ時はとれあらて皮は剥ぐ事あれ共。衣は維ひ目は切り解くべし。莫大小の襦袢は着て居るときは鋏は剪りて下衣は脱さるべし。其間は指の先は水油は付き衣は粘つきたるは皮は剥はるゝと衣と離るべし。火膨の出来たる時は横は剥して其水は取る事なれども。表皮の剥ぎぬやうは用心すべし。

火傷は冷水は浸すは最よし。中どろは

止めるあゝ。水は日向水位のぬるま温きもの最よし。熟くなるは取り換ゆべし。左側より冷水は注ぐべば自ら変る故は火傷の処は水より出は及ばず。

いさゝこの火傷なるは指先などの如きは蕃薯又は加ろう玉などは切り油。或ひは「ホルトガル」油などは療治すべし。

火傷したる処は硝酸銀はすりつける事最も

よき法なり。

場処廣く火傷したる時は及び肉深く焼たる時は寒き風はさゝ冷水などは大毒なり。ゆゑ時は水油は

其処を塗り。又ハ地油のかゝきんの切ハ油を浸し。こゝ
ろゝ其処に覆ひ再びこゝろゝ油にそゝぎ。其上を綿を
布つゝ被。巻布にて医官の来る迄待べし。
蒸氣に吸こゝろゝ熱き食物に喫ひ沸騰する湯に飲む等を
て内臓に火傷したるハ最も危き怪我なり。或ハ
急に呼吸つまりて忽ち死する事あり。或ハ粘液膜に
火傷して口咽氣管の内を烈しく燃衝に発して終の間を
死する事あり。
かゆゝの事ハ去ばゝとれあるものを非也。最も
速ふ手当にすべき事ハ。大てい蛋白と油と冷水を

攪ぜ。又ハ此二つの内の一つに「アラビヤゴム」と共に水を
攪ぜ口中をそゝぎこゝろ或ハ口を含ましむべし。
其軽きものハ冷たき「メルキ」牛乳に製し度々飲ましむべし。

撲傷の心得

撲傷ハ冷水を浸したる布に度々取りかへて当てしむ
べし。
骨のつがひに撲たる時ハ。其処の動かぬやうにすべし。
腕ハ十八枚めの圖の如く。肩を負ハしむべし。脚ハ
ハ歩行こゝに禁じ居こゝろ安べし。

眼を撲て其辺に瘀を受け。又ハ烈しき衝を発したる時ハ始めハ目を拵もつせ。「コムプレッス」を水にひたしてこれを覆ひ。或ひハ明の通るほど薄き布をあて。度々冷水にひたしあらたむべし。

内臓のきまりゆるみて。位置あしくなりたる時の

心得

股腰の内の方。睾丸の内なる子細ある人ハ。巻布をしてゐる事なく。此巻布の仕方宜しからず。又ハ勘弁なく巻布を解き。或ひハ躰の力を用ゆる事強く。或ひハ高き処より落ちなどする時。内臓のきまりゆるみて位置あしくなる事あり。これ舟人に多くある病なり。

股の上。腰の内。睾丸の内などに臓を発し。押試みれバ甚だ痛み。胸悪く腹痛あれども吐利なく。嘔吐甚しく。後にハ清水を吐き。其次にハ胆汁を吐き。終に糞を吐出すに至る。これ皆此病の徴候なり。

其手当ハ右のごとくきまりゆるみて垂れ下りたる臓腑なる。なるたけすみやかに内の方へ入るべきなり。其法先づ病人をして背を後ろにむかして坐せしめ。膝を立させ。腹を十分にたるませおき。それより腹を押し。又ハ摩擦し。陥りたる臓腑を元の位置に直しせん事を務

む。但し此時病人をして暖かなる室に入れ、むづし。此時大なる泡の消ゆる音きこえわたるべし。臓腑をあらためて戻りたる事を問ふべし。この音は腸の内みづきたる氣泡なるべし。この時直ちに巻布団し。尚ほ巻布の間は卧床に居らしめ前の諸症とともに消失せる待つべし。さもなくば士官の手に引き思ふまゝ行ふべき難きものなれば。時に臨てその其破裂したる処切断し。臓腑の位置を直し。死胎救ふとなれば。母の命ばかりを救ふ。

發行書林

大坂心齋橋通
仙台　伊門屋善兵衛
同　仙台屋九兵衛
東京日本橋通一丁目　浦源屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明町　浦源屋新兵衛
同　野　岡山屋嘉七
同　横山町三丁目　和泉屋吉兵衛
同　浅草茅町二丁目　和泉屋金右衛門
同　下谷数寄屋町　浦源屋伊八
同　本町三丁目　岡村屋庄助
同　本石町四丁目　上州屋宗七
同　小石川大門町　和泉屋半兵衛
鶴金屋清吉